

今の日本に置きかえて、考えてみるべき作品です

労働組合の闘士として理想のために闘い続けてきた初老の男性と、その妻を見舞った、一つの事件。社会が、時代が変わったのか。いや、まだできることはあるはずだ。人と人とのつながり、人を信じることの喜びを優しく語りかけてくる「キリマンジャロの雪」。全共闘世代の歌人・道浦母都子さんは、「今の日本に置きかえて、考えてみるべき作品」と話します。

それは時代のせいなのか

主人公の夫婦は、日本のいわゆる団塊世代よりは少し若いけれど、労働運動に関わり、闘ってきた人たちです。そんな労働者階級の人々の質素な生活が描かれる中で、事件が起こる。自分と同じくリストラされた、外国人らしき青年に主人公が襲われ、お金を奪われてしまう。

彼は自問します。時代が変わってしまったのか。いや、自分たちの闘いの歴史を、若い世代に伝えてこなかったからじゃないのかと。私たちの世代にも、その反省はあるんですね。今の日本では、「労働者階級」なんて言葉も見かけなくなりましたけれど、でも、この作品に描かれている不況、リストラ、ワーキングプアなどフランスが抱える様々な現実、日本と置きかえても少しもおかしくはない。その点で、すごくタイムリーな作品だと思います。

自分たちがやってきたことは何だったのか。私たちの世代は日本をよくしようとして、結局、負の遺産しか残せなかった。その責任はあると思っています。私は今年で65

歳になりますが、すでにリタイアしている同世代も多い。でもみんな、まだまだ元気なはず。余力があるはずだから、今だからこそ、なにがしかの社会還元ができるんじゃないかって、そう強く思いますね。

伝えることの大切さ

この主人公の夫婦は、犯人の青年とその家族のサポートを思い立ちます。キリマンジャロへの旅行という、ささやかな庶民の夢を捨て、より意義あることをしようと。名もなき市井の人々が、自分たちよりも弱い立場の人たちに共感し、手を差し伸べようとするのです。ひるがえって、あの大震災から後を見るにつけ、今の日本はどうでしょうか。地域の共同体が崩れ、核家族化が進む中で、今一度、家族を見直してみるべきではないでしょうか。人と人との絆、人間愛に立ち戻るべきでは。それが今、欠けているもの、本当に大切なことだと、この映画は教えてくれているような気がします。

どんな形であれ、できることをしたい。2月に、団塊世代を語り部にした、戦後から現在までの物語絵本「ふるさと60年 戦後の日本とわたしたちの歩み」（福音館書店）を出しました。自叙伝的な小説「光の河」（月刊「パンプキン」潮出版）の連載もスタートしています。これまでは躊躇していたのですが、学生運動のころの留置場体験なども書いています。若い読者の方々は、「そんな時代のことなんて知りませんでした」という声が届いています。この映画でもテーマの一つとなっている、伝えることの大切さ。あらためて感じています。



●和歌山県生まれ。1947年、和歌山県生まれ。72年、早稲田大学文学部卒業。80年、全共闘運動時の心情を歌に託した歌集「無援の抒情」で、現代歌人協会賞を受賞。以来、歌だけでなく、評論やエッセー、小説も手掛けている。

Les Neiges du Kilimandjaro  
キリマンジャロの雪

朝日新聞  
12(H24).6.1

作品介绍

舞台はマルセイユ。労働組合の委員長として奮闘してきたミシェルは、少しでも雇用を守るための苦渋の決断として、リストラを受け入れる。対象者はくじ引き。自身は黙って「当たりくじ」を引いた。しかし、事態は思わぬ方向へ。妻と一緒にいるところを強盗に襲われ、しかも犯人は、一緒に解雇された若者と知る……。

葛藤しながらも、青年とその家族に手を差し伸べようと決意する夫婦2人の心情が、温かく細やかに描かれてゆく。「マルセイユの恋」で日本でも知られるロベール・ゲディギャン監督は、時代が、世の中が変わろうと、これこそが本当の「勇気」だと、信じてやまない。さわやかに涙すること請け合いの必見作。

6月16日(土)から梅田ガーデンシネマ、23日(土)からシネ・リーブル神戸、7月から京都シネマでも公開。



©AGAT Films & Cie, France 3 Cinéma, 2011